

「^{テュラーテン・ヌース}
外来叡智」(voûç thûpôathëv)

高 橋 克 己

高知大学人文学部人間文化学科
人文科学研究第18号 別刷(2012)

テュラーテン・ヌース
「外来 叢智」(voūς θύραθεν) : intellectus extrinsecus

高橋克己

TAKAHASHI, Katsumi

(人間基礎論コース)

(Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät)

トルコ南西部 カーリア [Caria] の都市 アプロディースィアス Aphrodisias [Aphrodisis] 出身で、紀元 200 年前後に活躍した アリストテレス Aristoteles 学者 アレクサンドロス Alexandros [Αλέξανδρος ὁ Αφροδισιεύς] の『叢智論 : Περὶ voū』 (Commentaria in Aristotelem Graeca. Supplementum Aristotelicum. Volumen II. Pars I. Alexandri Aphrodisiensis De Anima Liber cum Mantissa. Berlin. Reimer. 1887. 1 頁-186 頁所収

〔靈〕魂論 : Περὶ ψυχῆς その 2 [Liber alter] 補遺 [Mantissa] [希 101 頁-186 頁] の 106 頁-113 頁) で話題の「アリストテレス 外来 叢智 : ó θύραθεν voūς」(111 頁 34) は、既にアリストテレスが『[諸]動物生成〔誕生〕論 : Περὶ Ζώων γενέσεως』第 2 書・第 3 章で使っている言葉である。【残る〔結論〕は、唯叢智 voūς のみが θύραθεν 外來で到来し、θεῖον 神的なのは唯これのみ。: λείπεται δὲ τὸν | voūν μόνον θύραθεν ἐπεισιέναι καὶ θεῖον εἶναι μόνον】(Immanuel Bekker 編 Akademie 版 Aristotelis Opera. Berlin. 1831. Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1960. Volumen 1[1 頁-789 頁]-Vol.2[791 頁-1462 頁]. 736B27-28)。当箇所を碩学 Thomas Aquinas (1225 年頃-1274 年) は『神学大全』第 1 部・第 118 問・第 2 項で、【明らかなのは他方、intellectus [叢智 voūς] の principium [原理 ἀρχή] は人間 [homo] に内在する、materia [質料 ὕλη] を超越する原理である。… 故に哲学者 [の中の] 哲学者アリストテレス】が語る、『残る〔結論〕は、唯 intellectus [叢智 voūς] のみが de foris [外来で θύραθεν 到來する。]』[736B27-28]と。: Manifestum est autem quod principium intellectivum in homine est principium transcendentis materiam; [...] Et ideo Philosophus dicit: „Relinquitur intellectum solum de foris advenire.“】(羅独 „Summa theologica“ Prima Pars 1265-1268. Lateinisch und Deutsch von Dominikanern und Benediktinern Deutschlands und Österreichs. Bd.1-8. Graz. Styria 1934-1951. Bd.8. Quaestio 118. Articulus 2. 300 頁) と引用し、「外来で」の意味を「質料 [ὕλη] を超越 [ὑπέρ] する原理 [ἀρχή] : principium transcendentis materiam」と説明している。

「超越 trans する : transcendens」とは、超越 [trans] し、scandere [登攀] する事) で、Γνῶσις 覚知 [Gnosis] 文献『ヘルメース文書 : Corpus Hermeticum』(1 世紀-3 世紀) 第 10 論・第 15 節なら「[神々の住居] Ολυμπος [Olympos] 登攀」、4 世紀以降躍進したトマース 達キリスト教徒ならモーセの「シナイ山 登攀」が念頭に在る。【これのみが人にとり 救済 である、神の 覚知 [γνῶσις] が。この 覚知 がオリュムポス 登攀】: τοῦτο μόνον σωτήριον ἀνθρώπῳ ἐστίν, ή γνῶσις τοῦ θεοῦ. αὕτη εἰς τὸν Όλυμπον ἀνάβασις.] (Hermès Trismégiste. Collection Budé. Tome I. 1946/ Tome II. 1946/ Tome III. 1954/ Tome IV. 1954. Les Belles Lettres 1983. Tom.1. 120 頁)。【また今度 [聖書] の言葉は、相応しい或る 登攀 に拵り [δι' ἀκολούθου τινὸς ἀναβάσεως]、[美]徳の一層より高次な諸事を目指し 私達の 思念 を手取り導く [χειραγωγεῖ τὴν διάνοιαν]。… モーセ [Μωϋσῆς] と雲霧 [νεφέλη] へと (לְאַפְעָנָה-לְאַפְעָנָה: 雲霧 へと : Biblia Hebraica Stuttgartensia. Deutsche Bibelgesellschaft 1967-77/1984. 119 頁 :『出エジプト記』20・21) 見遣る者 … その時その者は到達する、超越して在る自然本性の 観想 に。[προσάγεται τῇ τῆς ὑπερκειμένης φύσεως θεωρίᾳ.]】(Nyssa の教父

グレゴリオス Gregorios[Γρηγόριος Νύσσης]『モーセの生涯: Περὶ τοῦ βίου Μωϋσέως』390年頃: Patrologiae cursus completus. Paris. Migne 1844-66. Patrologia Graeca 1857-66 [=PG] / Patrologia Latina 1844-64 [=PL]. PG. Tom.44. Col.372C-373B). 実際古代ギリシアの[善]美の女神 Οὐρανία[Urania] Αφροδίτη[アプロディーテー]と親密な都市 Αφροδισιάς[Aphrodisias]の思想家Alexandrosの場合、当然「Olympos 登攀 : εἰς τὸν Ὄλυμπον ἀνάβασις」の方が重要である事に異論は無いが、いずれにせよ 外來 [θύραθεν] の光明として 外來 叡智がトマースの指摘通り、同時に「人間[homo]に内在する (in homine)、質料を超越する原理である叡智の原理」と表裏一体になっている点も見逃せない。

従って近世思想の経験論が説く習得[acquire]観念[idée]の習得[acquis]の様な 後天的 [a posteriori]習得[acquis : 羅adeptus]の成果として「外來 叡智: intellectus extrinsecus」を考えると的外れである。むしろ当 外來 叡智のadeptus[到来・獲得]は「人間に内在する叡智の原理」から推すと、正に生得[innate]観念[idée]の生得[inné]の様に先天的 [a priori] 生得[inné : 羅innatus]と言える。そこで 外來 叡智は、亞訳(9世紀 حنین[Hunaïn] [bn] [Ishâq]訳『العقل』[叡智]にに関する[مقالات]論文): Mélanges de l'Université Saint Joseph. Tome 33. Fascicule 2. 1956. 181頁-199頁) や、羅訳(12世紀Gerardus Cremonensis[北伊Cremona出身Gherardo]垂語から重訳:『叡智と叡智界: De intellectu et intellecto』: G. Théry «Alexandre d'Aphrodise. Aperçu sur l'influence de sa noétique» Kain [Belgique]. Revue des sciences philosophiques et théologiques du Sauchoir. 1926. 74頁-82頁)で、どの様に成っているのか、またAlexandrosの説く「第二の叡智」、「正に思惟する事と現実[活動]態にある事の素質[能力]を追加獲得し[能力増強した][一種の]質料的[叡智]」との関係はどうであろうか。これらについて考察する前に、そもそも Alexandrosが叡智を三種に区別し、その筆頭の第一の叡智に言及する文面に触れておこう。【Νοῦς[叡智は]、Aristotelesに拠ると三種[τριττός]あり、その一つは質料的叡智[νοῦς ύλικός]である。】(『叡智論』希 106頁 19/107頁 15-20)【また例の[質料的]叡智[νοῦς]は、身体を媒介して[諸存在を]捕捉し無いし、また身体[σῶμα]の[機能]能力[δύναμις]である事も無いし、[影響]作用を受け[πάσχον]無いし、完全に ἐνέργεια現実態にある[完成現実態]の諸物の何れで在る事も無いし、可能態の[特殊な個物の]何かこのものでも無く、そうでは無くて、正にその様な完成現実態[ἐντελέχεια]の[靈]魂[ψυχή]の、諸形相[εἰδος]や諸思惟内容[νόημα]の[捕捉]受容可能[δεκτική]な或る[潜在]能力[δύναμις]に他ならない。この[οὗτος]当の叡智[ό νοῦς]が、一方実際質的[ύλικός]で在り、完璧な[τελεία] [靈]魂[ψυχή]を共有している者[κεκοινωνηκώς]達全て、即ち 人間 達全ての中に[内在して]在る。: [...] οὐτος μὲν οὖν ὁ νοῦς ύλικός ἦν ἐν πᾶσιν ἐστι τοῖς τῆς τελείας ψυχῆς [19] [20] κεκοινωνηκόσιν, τοντέστιν ἀνθρώποις。】

第一の質料的叡智も「人間 達全ての中に[内在して]在る: ἐν πᾶσιν ἐστι τοῖς [...] ύλικόποις」と言う点が見逃せない。次の第二の叡智に関しても、この基本線は変わら無い、と読み取り得る。【他方別[種]である、叡智が、正に思惟し、思惟する事の[能力]素質[ξέις]を有し、それ自体の[潜在]能力に拠り諸叡智界[思惟の諸対象]の諸形相を[捕捉し]欄む[潜在]能力を有するなら。これは[技芸家]職人[達]の[能力]素質[ξέις]を有する者達に類似している。この者達には[他人に頼らず]自分達自身で技芸に拠る諸物[品]を創出する[潜在]能力がある。[この技能者の類が當叡智である]。即ち第一の[質料的叡智]は、当[技芸熟達の]職人達の類では無く、むしろ技芸を手にして、職人に成る[潜在]能力がある者[徒弟]達の類であった。又当叡智も、正に思惟する事と現実[活動]態にある事の[能力]素質[ξέις]を追加獲得し[προσειληφώσ] [能力増強した][一種の]質料的[ό ύλικός][叡智]である。当のこうした叡智[ό τοιούτος νοῦς]は、より完璧な人々、つまり正に思惟する者達においてのみ存在し、これが一面実際、第二の叡智[ό δεύτερος νοῦς]である。】(『叡智論』希 107頁 21-28)。人間達[ἄνθρωποι πάντες]全てが、思惟する者達[νοοῦντες]に他なら無いなら、当然第二の[δεύτερος νοῦς]叡智も第一の[πρώτος]質料的叡智同様「人間 達全ての中に[内在する]」と考えられ得る。従って両者とも正に生得[inné]

イデー イデー イン・ネ イン・ネ
観念 [idée] の生得 [inné] の様に先天的 [a priori] 生得 [inné : 羅 innatus] と言えよう。

アレクサンドロスの三種の叡智の内、最後の第三叡智は創出的 収智であり、これが 外来 収智の礎と成る。【前述の二つ δύο の外に他方第三叡智、創出的 [ποιητικός][叡智] が在り、これを介し質料的 [ύλικος][叡智] は [能力] 素質 [εξις] 状態と成る。類似である、この 創出的 [ποιητικός][叡智] は、(『[靈] 魂論 : Περὶ ψυχῆς』 3・5[430A15-17] で) Aristoteles が述べている様に、光明に。: Τρίτος δέ ἐστι νοῦς παρὰ τοὺς προειρημένους δύο ὁ ποιητικός, δι' ὃν ὁ ύλικός ἐν ἔξει γίνεται, ἀνάλογον ὃν οὗτος ὁ ποιητικός, ὡς φησιν ὁ Αριστοτέλης, τῷ φωτί。】(『叡智論』希 107 頁 29-31)。話題の『[靈] 魂論 : Περὶ ψυχῆς』 3・5[430A10-17] で Aristoteles はこう記している。【自然本性中或るものは各類にとり 質料 (これは デュナミス 可能態にある万有諸物) であり、他は 原因 で 創出的 [ποιητικόν]、何であれ万有諸物を創出する事が属性、一種の [技芸学] 術 で、質料に対峙した状態である。必然的に又 [靈] 魂中でも既に在る、[13|14] そうした相違は。一方で万有諸物に成る点での [質料の様に可能態に在る] そうした叡智が、他方で万有諸物を創出する点での叡智が在り、言わば 光明 [φῶς] の如き [能力] 素質 [εξις] に似る。即ち 一種光明も又、可能態に在る諸色彩を現実態にある諸色彩として創出する。: καὶ ἐστιν ὁ μὲν τοιοῦτος νοῦς τῷ πάντα [14|15] γίνεσθαι, ὁ δὲ τῷ πάντα ποιεῖν, ὡς ἔξις τις, οἷον τὸ φῶς; [15|16] τρόπον γάρ τινα καὶ τὸ φῶς ποιεῖ τὰ δυνάμει ὄντα χρώ· [16|17] ματα ἐνεργείᾳ χρώματα。】当『[靈] 魂論 : Περὶ ψυχῆς』 3・5[430A12] の「原因」で 創出的 [ποιητικόν] : τὸ αἰτιον καὶ ποιητικόν, が、アレクサンドロスの『叡智論』希 107 頁 29 「創出的 [...] 収智 : νοῦς [...] ὁ ποιητικός」の礎であり、その「万有諸物を創出する点での叡智 : ὁ δὲ τῷ πάντα ποιεῖν」の類似である比喩が光明 [φῶς] に他ならない。

光明 [φῶς] の類似である比喩は、Πλάτων[Platon] の『国家 : Πολιτεία』508B-C の場合、日輪 [神] の類似である比喩が相当する。【私 [Socrates] は語った、[Glaucōn]君、]それなら日輪 [神] を善 [美] の息子と私が言っていると [君は] 述べるべきだ、この息子を善 [美] がそれ自体の類似 [ἀνάλογον] として生んだ、善 [美] が叡知的な場で叡知と直知内容に対しそうである所のもの、それを日輪 [神] が可視的な場で視覚と諸可視物に対してある者 [と君は述べるべきだ]。: Τοῦτον τοίνυν, ἦν δ' ἐγώ, φάναι με λέγειν τὸν τοῦ ἀγαθοῦ ἔκγονον, ὃν τὰγαθὸν ἐγέννησεν ἀνάλογον [508B/C] ἔαντῳ, ὁ τι περ αὐτὸν ἐν τῷ νοητῷ τόπῳ πρός τε νοῦν καὶ τὰ νοούμενα, τοῦτο τοῦτον ἐν τῷ ὄρατῷ πρός τε ὄψιν καὶ τὰ ὄρωμενα。】(Platons Werke. [底本]«Euvres complètes: Collection Budé 1955-1974». Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1971-1981. Tom.7. Part.1. p.137: Bd.4. S.540)。あたかも 日輪などの光明が射し込んで来る様に、「創出的 [...] 収智 : νοῦς [...] ὁ ποιητικός」は到来し、「これを介し質料的 [ύλικος][叡智] は [能力] 素質 [εξις] 状態と成る。」(『叡智論』希 107 頁 29-31) と、アレクサンドロスは論じており、この「言わば 光明 [φῶς] の如き [能力] 素質 [εξις]」の源が 創出的 収智である。但し、当 [能力] 素質 [εξις] は、外から [θύραθεν] 到來した 外来 収智を、到達した叡智を獲得した 質料的叡智の側から眺めると、上述の第二の叡智 (『叡智論』希 107 頁 27-28) に似て「人間 達全て の中に [内在して] 在る」と言える事にもなる。【純粹叡智 [όνος καθαρός] を有す時は恒に χρώμενοι [私達は予感する]、これが内在叡智 [όν ενδον νοῦς] であると。: ὅταν νοῦς καθαρὸν ἔχωμεν, χρώμενοι, ὡς οὗτος ἐσ- τιν ὁ ενδον νοῦς,】(Πλωτίνος [Plotinos] 著『エンニアデス : Enneades』5・3・14: Plotins Schriften. Bd.1-5. Philosophische Bibliothek. Bd.211-215. Hamburg. Felix Meiner 1956-1967. Bd.5. S.160)

この結果 外来 収智の外から [θύραθεν] は大抵、亜訳と羅訳で 「مستفاد : [到達]獲得 : adeptus」と 成る。但し、「خارج [外側] من [から]」(希 113 頁 18 : 亞 199 頁 3 : 羅 82 頁 20 : extrinsecus / 希 113 頁 21 : 亞 199 頁 6 : 羅 82 頁 24 : extra) と直訳される場合もある。しかし直訳されている箇所は、外来 収智が「人間 達全て の中に [内在して] 在る」と説く内在説を反駁している。他方 外来 収智 の内在を説く文脈なら、外来 は 「مستفاد : [到達]獲得 : adeptus」である。内在説反駁 (希 113 頁 12-24 : 亞 198 頁 8-199 頁 10 : 羅 82 頁 13-27) 数行 (希 13 行 : 亞 13 行 : 羅 15 行) は『叡智論』

の末尾を飾っているが、これが結論とは考えられ難い。むしろ先行する内在叡智論（希 112 頁 5—113 頁 12：亞 195 頁 3—198 頁 8：羅 80 頁 41—82 頁 13）の方が分量も多く（希 40 行：亞 40 行：羅 58 行）、かつ印象深い文面が見出される。また内在叡智論と、その前提の外來 収智論（希 110 頁 4—112 頁 5：亞 189 頁 11—195 頁 3：羅 78 頁 40—80 頁 40）の部分（希 71 行：亞 63 行：羅 94 行）は共に、前 4 世紀のアリストテレスでは無い、アレクサンドロスの師、Μυτίληνος[Mytilene] のアリストテレス[Ἀριστοτέλης ὁ Μυτιληναῖος] の所論で（Paul Moraux „Aristoteles, der Lehrer Alexanders von Aphrodisias“ : Archiv für Geschichte der Philosophie. Bd.49. Berlin. Gruyter 1967. S.169-182. S.182: Wenn wir uns auf die verschiedenen hier analysierten Testimonien verlassen dürfen, ist Alexander von Aphrodisias Schüler eines aus Mytilene stammenden Peripatetikers namens Aristoteles gewesen.）、【また私は聞いた、外來 収智論に関し、アリストテレスから。それらを私は心に留めた。】（希 110 頁 4）とアレクサンドロスは記し、この後 外來 収智論と内在叡智論に関するミュティレーネーのアリストテレスの論述（希 110 行：亞 102 行：羅 152 行）が紹介され、この付録として手短な反論が数行（希 13 行：亞 13 行：羅 15 行）来る。以上の『叡智論』後半は主に師の遺稿と看做され、『叡智論』前半（希[計 112 行]106 頁 19—110 頁 3：亞[計 106 行]181 頁 3—189 頁 10：羅[計 149 行]74 頁 21—78 頁 39）と趣を異にしている。

アレクサンドロス 一応Alexandrosが手短な反論を、【反駁する事が私には[適切と]思われた、以下の諸事に対し。: ἀντιπίτειν ἐδόκει μοι τούτοις】(113 頁 12) と書き始め、ここから数行だけ彼自身の発言なので、とにかく重視され易い。しかし読者の心に感銘を与えるのは、むしろ反論に先立つMytileneのアリストテレスの論述の方で、少なくとも亜訳者Ishâqと彼の解釈を伝統として受け継いだ中世思想界は上記Thomasの様に、de foris[外來でθύραθεν]到来する叡智に関し「materia[質料 ὄλη]を超越する人間[homoi]に内在するintellectus[叡智]のprincipium[原理]」を重視し、その結果 外來 叡智は単に 「خارج [من [から]]」(extrinsecus/ extra) だけで無く、敢て心の内奥における[到達]獲得 : مستفاد [外側] [من [から]]」(extrinsecus/ extra) だけで無く、敢て心の内奥における[到達]獲得 : مستفاد : adeptus]の相の下に考察される事と成る。例えば前述の『叡智論』原典(希 107 頁 26)で第二の叡智が、【正に思惟する事と現実[活動]態にある事の[能力]素質[ξέιη]を追加獲得し[προσειληφωξἱ] [能力増強した]【一種の】質料的[ό ύλικος] [叡智]】と規定されている所の「追加獲得し[προσειληφωξἱ] [能力増強した]」に、既に「استفاد」[獲得し] lacquirit(亜 184 頁 4: 羅 76 頁 15)と「مستفاد」:[到達]獲得 : adeptus]の相が出ている。【また当叡智も質料的 叡智で、これは ملکة [生得才能 : habitus : 素質能力]が質料的叡智に誕生し、叡智が فعل [現実態 : actus : 現実態 : ἐνέργεια]で思惟する[能力]を獲得し lacquirit】て後のものである。: Et hic intellectus est intellectus materialis postquam fit ei habitus et acquirit ut agat et intelligat,】(亜 184 頁 3-4 : 羅 76 頁 14-15)。しかもも当acquirit[獲得し : استفاد : آئیریت]には、後天的 [a posteriori]習得[lacquis]と言うより、むしろ先天的 [a priori]生得[inné : 羅 76 頁 14-15]innatus]の面が見逃せない、と言うのが 9 世紀イスハーケ以降の着眼点である。

話題の外來叡智が「خارج[外側] من[から]: extrinsecus / extra」のみならず、「مستفاد: [到達]獲得: adeptus」でもある事を明示する文面は、ミュティレーネーのアリストテレスの語る外來叡智論に見出せる。【叡智、即ち、それは自然本性上、خارج[外側] من[からの]extrinsecus[外来的]、[到達]獲得 [مستفاد] adeptus 収智で在り、私達に内在する[可能態の質料的]叡智を助ける者に他ならない。実際他の可能態の諸物の内どれも思惟され得ない、もし自然本性上[思惟対象]の叡智界: معقول: 可想叡智界 intelligibile: 理念界]が無ければ。所でこれはそれ自体の本性上叡智界[intelligibile: 理念界]である所の者であり、これが思惟[主体]者において可能態で在ると言われる時、その時[思惟主体]は自ら自体を فعلى [現実態] effectusにおいて思惟し、その時従って、امتیت [マヒット] ラー イン・モルタリス [不滅] で、خارج[外側] من[からの]extrinsecus[外来的] adeptus [到達]獲得 [مستفاد] عقل [عقل] intellectus が誕生する。これが質料的の叡智 [materialis] : intellectus materialis]の中に الملكة [الملكة] 生得才能 [ملك] へクスイ質する。これが質料的の叡智 [materialis] : intellectus materialis]の中に الملكة [الملكة] 生得才能 [ملك] へクスイ質

ハビトゥス [habitus] を形成した叡智であり、結果質的叡智は、可能態の諸叡智界 [intelligibile : 理念界] を受容する。】(亜 194 頁 1-6 : 羅 80 頁 21-28)。鍵語「[من] خارج [外側] من [からの] مستفاد」 [到達獲得] [叡智] : intellectus adeptus extrinsecus が、外来の 叡智と 獲得 叡智を繋ぎ合わせ、これに拠り 外来 叡智と [到達] 獲得 叡智が同一視される。この際 プラトーン風 理念界 [مقول : 叡智界 : intelligibile] が、叡智の思惟の礎と成っている点が、興味深い。

目下の文面はアレクサンドロスの原典では次の様に記され、更に光明の比喩で例証して後、「故に自然本性からして、一方この[外來]叡智が本来、[思惟認識対象の]叡智界[理念界]である：*εστιν οὐν φύσει μὲν νοητὸν ó νοῦς*」(希 111 頁 36)と核心に触れる。【協力者と成るであろう、私達の内なる潜在可能態の質料的]叡智に対し、自然本性上[存在する]外來 収智が。理由は、もし【独立した】固有の自然本性を礎に或る叡智界[理念界]が存在しないならば、潜在可能態の別の諸思惟界は存在し無いであろう故。これは実際、それ自体の自然本性に拠り[自力で存在する独立固有の]叡智界であり、思惟[主体]者の[心の]中で思惟される事に拠り叡智とも成り、[当叡智は、こうして]思惟[主体]者の[心の]中に生成誕生して、かつ 外來 [の存在として]思惟され、[当 外來 収智は]不滅であり、また質料的[叡智]に素質[能力]を吹き込み、この結果、質料的叡智は潜在可能態の諸叡智界を思惟する。】(希 111 頁 27-32／111 頁 32-36)【あたかも即ち、現実[態]の視力の創出[原因]である光明の様に、[32|33] 又この光明自体が、光明と共に在する[被写体]諸物と共に看取される様に、かつ光明により色彩が看取される、その様に他方また [33|34] 外來 収智は、私達が思惟する事の原因と成り、[その時 外來 収智]自体も[私達により]思惟される。【但し、この時、外來 収智は新たに】叡智自体を創出するのでは無く、むしろ[既に]存在している[私達に内在する質料的]叡智を、[外來 収智]自体の自然本性[の力]で完璧化し、かつ固有な諸事[活動]へと導く。故に自然本性からして、一方この[外來]叡智が本来、[思惟認識対象の]叡智界[理念界]である。】(『叡智論』希 111 頁 27-36)。かくして思惟する限り、理念界の[*مَفْعُولٌ* : 収智界]叡智界と叡智が表裏一体である旨、これこそ『叡智論』の基底に据えられている眼目であり、後半のミュティレーネーのアリストテレスに拠る目下の文面のみならず、アレクサンドロス自身が第三叡智の創出的 収智に関し語る前半でも主張されている。【即ち叡智が現実態の[思惟認識対象の]叡智界[である]】：*νοῦς γὰρ τὸ κατ’ ἐνέργειαν νοητόν*。】(希 108 頁 18-19／亞 186 頁 1-2; 羅 77 頁 6-7)【*مَفْعُولٌ* [叡智界]بِهِ [恒に]هُوَ [叡智は]】(2|1) [الفعل بالفعل]【現実態の[*العقل*]叡智は]心[即ち]：intelligentia[叡智]は即ち 現実態で、恒に[思惟認識の]intellecta[叡智界]で在る。: Intelligencia enim in effectu, semper est intellecta[。】

い。】(『叡智論』希 111 頁 36 / 112 頁 1-5 : 亞 194 頁 9 : 羅 80 頁 34)。

同じ νοῦς 叡智[عقل 叡智]が、高次の intelligencia と普通の intellectus に訳し分けられていると共に、单数の νοητόν 叡智界[المعقول 叡智界]が intelligible[叡智 νοῦς 界] : 理念 iδέα 界]、複数の νοητά 諸思惟界[الأشياء المعرفة 諸思惟] : 諸思惟[対象]物とか intellect[諸 intellectum] とされ、单数の方は根源の 叡智 νοῦς 球界[理念 iδέα 界]を、複数は普通の可想界である諸思惟[対象]物を意味している。丁度プラトーンの理念[iδέα]の様に、アレクサンドロスの 創出的 [ποιητικός] 叡智は、外から ἔξωθεν (ج[外側] من[から]) の 外來 [θύραθεν] νοῦς 叡智 [νοῦς] として働きかけて来る。この事を彼は、【外來 θύραθεν と言われる当創出的 叡智[الفاعل] [能動的] [المستفاد] [عقل] 叡智] : intellectus adeptus agens) は、私達の [心] 魂 ψυχή [心魂] (anima) の部分や或る潜在能力 (فُوَّة) [能力] : virtus) でも無く、むしろ外から ἔξωθεν (ج[外側] من[から]) : ab extrinsecus) [到来し] 私達の中に誕生する、[23 | 24] この創出的 叡智を私達が思惟する時は恒に。即ち実際一面、εἰδος [形相] (الصورة) [形相] : formal) の 把握により思惟する事が誕生するのであるから、[24 | 25] また他面それは εἰδος ἀρχον [非質料的形相] (غير مادي [عقلي] [叡智的] [التصور] [理念] : ymago intelligibilis [叡智界の心象]) で在る故、ὑλη 質料を決して随伴せず [独立し離在で]、かつ又その質料から χωρίζομενον [離在で] も無い、実際思惟される時は恒に。】(希 108 頁 22-26 : 亞 186 頁 4-9 : 羅 77 頁 10-15) と述べている。

一見した所 εἰδος ἀρχον [非質料的形相] (العقلي) [叡智的] [理念] : ymago intelligibilis [叡智界の心象]) に関し希亜で矛盾する事が説かれている。【ὑλη 質料を決して随伴せず [独立し離在で] : oὐ μεον' ὄλης ὁν ποτε [離在] [الهيولي] : non [非] conjuncta [結合] materie [materiae : 質料と]】(希 108 頁 25 / 25-26 : 亞 186 頁 8 / 8 : 羅 77 頁 14 / 14-15) 【かつ質料から離在で無い : οὐδες χωρίζομενον [25 | 26] αὐτῆς : ها [質料] تفارق [تقارب] [から離在で] لغ [無い] / تقاربها [質料に接近] لغ [無い] : sed sepa- [14 | 15] rata ab ea : そうでなく質料から離在】。西国の Escorial 所蔵亜語写本は希語原典に対応しているが、Byzántion [Byzantium] 所蔵亜語写本は羅語訳の底本と看做される。成程もし羅訳の様なら矛盾は生じ無い。しかし原典でアレクサンドロスが矛盾する様に見える事を述べている理由も十分考えてみる必要がある。むしろ微妙な脈絡は結構その様に語られる場合が多い。要は離在である事を如何に解するか、が問題である。例えばプラトーンの『Φαῖδων : Phaidon』67C (Tom.4. Part.1. p.17: Bd.3, S.34)において Σωκράτης [Sokrates] の語る所に拠れば、【Κάθαρσις 清浄化が [...] 最大限 σῶμα [身] 体から ψυχή [靈] 魂を χωρίζειν 離在させる事、また [靈] 魂があらゆる面で [身] 体から [離在で]、[精神] 統一する事に、かつ [自己] 集中する事に、現今も将来も、あたかも諸束縛からの様に [身] 体から解放され、[靈魂] 自体 [の力] に拠り唯一単独者として住す事に、可能な限り [靈魂] 自体 [の力] に拠り慣れる事】とされ、眼目が 【身] 体からの [靈] 魂の解放 [独立] と離在 : λύσις καὶ χωρισμὸς ψυχῆς ἀπὸ σώματος】と語られている。

【非質料的形相 : 叡智の理念 : 叡智界の心象】(『叡智論』希 108 頁 25 : 亞 186 頁 7 : 羅 77 頁 13) や、外來と言われる創出的 叡智[الفاعل] [能動的] [المستفاد] [عقل] 叡智] : intellectus adeptus agens) (希 108 頁 22 : 亞 186 頁 5 : 羅 77 頁 11) の解放 [独立] と 離在 も [靈] 魂の場合と同様、【あらゆる面で [身] 体から [離在で]、[精神] 統一する事 συναγείρεσθαι に、かつ [自己] 集中する事 ἀθροίζεσθαι に、自体 [の力] に拠り唯一単独者として住す事に、自体 [の力] に拠り慣れる事】であろう。従って [靈] 魂や形相や叡智が [身] 体に関係し、その 【ها [質料] تفارق [تقارب] [から離在で] لغ [無い] : 質料から離在で無い】(亞 186 頁 8 : 希 108 頁 25-26) としても、それらは【私達の [心] 魂 ψυχή [心魂] : anima) の部分や或る潜在能力 (فُوَّة) [能力] : virtus) で無い】(希 108 頁 22-23 : 亞 186 頁 5 : 羅 77 頁 11-12) と言い得る。即ち純粹に [精神] 統一する事や [自己] 集中する事が可能なら敢て [靈] 魂 [靈魂] と呼んで差支え無いであろうし、そうした事が不十分なら未だ [心] 魂 ψυχή [心魂] は [身] 体 [身体] の部分や或る潜在能力 (能力 : virtus) に留まろう。そして後者の場合に關し『[靈] 魂論』(希 21 頁

22-24) でアレクサンдросは、こう述べたと思われる。【[靈]魂は[身]体の形相で、([身]体に宿る以前の[靈]魂について) 予め何が言われようとも、(未だ解放[獨立]と離在^{ヨーリスモス}が不十分で) 離在^{ヨーリスモス}では無い($\alpha\chi\omega\text{-}[22|23]\ \rho\iota\sigma\tau\omega$) と言う点において、[身]体のその様な形相(である[靈]魂)も、また[身]体と共に滅びるであろう(καὶ συμφθείροιτο ἀν τῷ σώ- [23|24] ματι,)、([靈]魂が) 実際、[靈]魂の[宿る]壊滅可の[身]体の形相(φθαρτὸν σώματος εἰδός) である限り。】

エドゥード・スース
前述の実証文献学の成果で今日は、内在叡智論（希 112 頁 5—113 頁 12：亞 195 頁 3—198 頁 8：羅 80 頁 41—82 頁 13）と外來叡智論（希 110 頁 4—112 頁 5：亞 189 頁 11—195 頁 3：羅 78 頁 40—80 頁 40）の Aristoteles が、前 4 世紀の Aristoteles では無い、Alexandros の師、Mytilene のアリストテレスであると看做している。他方しかし中世の亞訳や羅訳で、【到達獲得[مستفاد]】^{ムスタファード} [叡智[فہم]に関する[عن] Aristutalis[ارسطو طالیس]私[می خواستم]】^{アク} (アリストターリス [アン] [アビムト] [インデレクシイ] [私は理解した]) (亞 189 頁 11) とか【 intellexi [私は理解した] quod [即ち] opus fuit Aristotili [Aristoteles] にとり仕事であった】 interponere intellectum adeptum,【到達獲得叡智を導入する事が。】】 (羅 78 頁 40) に触れた読者が、西暦紀元前 4 世紀の Aristoteles の方を想定した可能性は極めて高い。既に示した通り原典は、【私は聞いた、アリストテレス 外來叡智に関し、Aristoteles から： Ἡκουσα δὲ περὶ νοῦ τοῦ θύραθεν παρὰ Αριστοτέλους】 (希 110 頁 4) とあり、「私は理解した： intellexi」で無く、「私は聞いた」 [ἀκούσα] と有るので、直接耳にした相手がアレクサンドロスの身近に居ると想像し得る。これに対し、亞訳と羅訳では事情が異なり、内在叡智論と外來叡智論を「Philosophus dicit： 哲学者【の中の】哲学者アリストテレス】が語る」 (上記『神学大全』1・118・2) と成れば、この両論にアレクサンドロスが数行の内在説反論 (希 113 頁 12-24：亞 198 頁 8—199 頁 10：羅 82 頁 13-27) を付加しても、この数行は補足以上の役割を果たさないであろう。少なくとも中世 Ishāq 以来の伝統は、内在叡智論と外來叡智論の方を重視し、外來叡智を【到達獲得[مستفاد]】^{ムスタファード} [叡智[فہم] intellectus adeptus】と解釈して、今日なら「経験論者の誰か： irgendein Empirist」 (Hirschberger „Geschichte der Philosophie“ Bd.1. 1948. 12. Aufl. Freiburg i.B. Herder 1980. S.294) と評され氣味なアレクサンドロスを、敢て先天的 [a priori] 生得 [inné : 羅 innata] 観念 [idée : idea] を尊ぶ叡智論者 (Noologist : Immanuel Kant „Kritik der reinen Vernunft“ 1781. 2.Aufl. 1787. S.882) として受容したのである。

エンドン・スース
内在叡智論を説く *Mytilineo* のアリストテレースは、更にこう述べる。【一方即ち、精液の最初のカタボレー
播種[受精]直後、現実態の叡智は、正に万有諸物に行き渡り、そして現実態[のまま]であり、一般の人々の別の或る何らかの身体部分の場合と同様である。他方また私達の潜在能力を介して、叡智が現実態として活動する度毎に、その時それは私達[人間]の叡智と言われ、そして思惟するのは[他ならぬ]私達である。例を挙げると、仮に誰かが職人を思い浮かべ、ある時は諸道具なしで、ある時は諸道具を手にして、技芸に勤しんでいる姿を想像してみると、後の場合技芸に携わる現実態[の仕事]は職人にとり、[素材]質料に關係して生起している。正にその様に例の神々しい叡智も [271-28] 一面恒に現実活動しており、それ故また叡智は現実態である。そして他面、[道具]器官を介しても[当叡智は現実活動している]。諸身体[各部]との結合、また *εὐκρασία*（良き混合調和）から、その様な器官が生まれる時は恒に、即ち正に叡智はその時、或る質料的な現実態の活動を為す。そして是が私達[人間]の叡智である。[30|31] 又實際叡智は外へ分離する、[離在の外から私達の]中へ分離するのと同様。即ち叡智が場を転じ、他の所に在る事は無く、むしろ叡智は至る所に在り[遍在して]留まり、[肉体から靈魂の]外への分離で解除された身体[*靈體 σώμα πνευματικόν*]にも留まる、[道具]器官[である身体]が消滅しても。[ここで叡智は]職人似て、自らの諸[道具]器官を見捨てつつも、確かに尚その時も現実活動している。とは言え實際これは質料的[道具]器官的な現実態[の活動]では無い。: *εύθυ μὲν γὰρ τῇ πρώτῃ καταβολῇ τοῦ σπερ-ματός ἐστιν οἱ ἐνεργείᾳ νοῦς διὰ πάντων γε κεχωρηκὼς καὶ ὡν ἐνεργείᾳ | ως καὶ ἐν ἀλλῳ τινὶ σώματι τῶν τυχόντων ἐπεδὰν δὲ καὶ διὰ*

τῆς ήμε- | τέρας δυνάμεως ἐνεργήση, τότε ήμετερος νοῦς οὗτος λέγεται καὶ ήμεις νο- | οῦμεν ὥσπερ εἰ τις τεχνίτην ἐννοήσαι τοτὲ μὲν ἀνευ ὄργάνων ἐνεργοῦντα [25 | 26] κατὰ τὴν τέχνην, τοτὲ δὲ καὶ μετ' ὄργάνων, ὅτε καὶ ἡ κατὰ τὴν τέχνην | ἐνέργεια αὐτῷ περὶ τὴν ὕλην γίνεται. τὸν αὐτὸν τρόπον καὶ ὁ θεῖος νοῦς | ἀεὶ μὲν ἐνεργεῖ (διὸ καὶ ἔστιν ἐνεργείᾳ), καὶ δι' ὄργανου δέ, ὅταν ἐκ | τῆς συγκρίσεως τῶν σωμάτων καὶ τῆς εὐκρασίας γένηται ὄργανον τοιοῦτον. ύλικὴν γὰρ ἥδη τινὰ τότε ἐνέργειαν ἐνεργεῖ καὶ ἔστιν οὗτος ήμετερος νοῦς. [30 | 31] καὶ ἐκκρίνεται δή, ὅνπερ τρόπον καὶ εἰσκρίνεται. οὐ γάρ ἀλλαχοῦ ὡν | μεταβαίνει, ἀλλὰ τῷ πανταχοῦ εἶναι μένει καὶ ἐν τῷ ἐκ τῆς ἐκκρίσεως δια- [112 頁 32 | 113 頁 1] λυομένῳ σώματι φθειρομένου τοῦ ὄργανικοῦ, ὡς ὁ τεχνίτης ἀποβαλὼν τὰ | ὄργανα ἐνεργεῖ μὲν καὶ τότε, οὐ μὴν ύλικὴν καὶ ὄργανικὴν ἐνέργειαν.] (『叢智論』希 112 頁 21-32 – 113 頁 1-2)。

受胎後直ちに【現実態の[الفعل](現実態)の: in effectu]叡智[العقل]: intellectus]は、正に万人に
 クップル シャイウ ケヨーレーコース ナーフィザー エヌルゲイア
 [كل (万) (物)]に: in omni re]行き渡り[نافذة] (行き渡り): penetrabilis]、そして現実態[のまま]
 である。: έστιν ὁ ἐνεργείᾳ νοῦς διὰ πάντων γε κεχωρηκὼς καὶ ὃν ἐνεργείᾳ] (希 112 頁 22 : 亞 196 頁
 9-197 頁 1 : 羅 81 頁 23-24) と記され、人間誕生と叡智の現実化は同時であり、この「ήμέτερος νοῦς
 ハーメスロス・ヌース ナー・リ アクル
 [私達の叡智]: لـ[私達の] عـقل[叡智]: intellectus nobis」(希 112 頁 24 : 亞 197 頁 2 : 羅 81 頁 27)
 ティオオス・ヌース イラヒー アクル
 へと「ο θεῖος νοῦς[神々しい叡智]: الـعـقل[神的] [叡智]: intellectus instrumentalis[器官道具的
 叡智]」(希 112 頁 27: 亞 197 頁 4: 羅 81 頁 31) が、プラトーン風理念*iδέα*界[intelligibile: 叡智νοῦς
 アテナイ アクロボリス アテナー
 の Παρθενών[Parthenon]神殿ながら、質料 $\delta\lambdaη$ の θύραθεού外から、換言すれば[心]魂の底 (der
 パルテノーン ヒーリー デーラーテン ドル・ゼレ・グルント
 sâle grund: Meister Eckhart „Von dem edeln menschen“ etc.) から、働きかけつつ、この神々しい
 ヌース バンタクー・エイナイ メキイ クール フィー
 叡智は「至る所に在り[遍在して]留まる (τῷ πανταχοῦ εἰναὶ μένει): الكل [万有] [中に]: est in toto」
 (希 112 頁 31: 亞 197 頁 8: 羅 81 頁 36)。ここで羅訳のみ【intellectus instrumentalis: 器官道具的
 ティオオス・ヌース イラヒー アクル
 叡智】と、【ο θεῖος νοῦς[神々しい叡智]: الـعـقل[神的] [叡智]]】を解しているのが興味深い。語釈
 コンファンデュ
 として亞訳 197 頁の脚註 10 は、【c'est la 3^e fois qu'on a ainsi confondu avec الـعـقل [神的]】と記し、
 イラヒー アーリー コンファンデュ
 羅訳が الـعـقل [神的]を【器官道具的】と 3 回 混同 (亞 196 頁 6: 羅 81 頁 13 / 亞 196 頁 6: 義 81
 頁 19-20 / 亞 197 頁 4: 義 81 頁 31) していると指摘している。

イスハーカの解釈により、現実態の[العقل] [ال فعل] [العنق] (intellectus in effectu) と、器官道具的[البصري] [العنق] [العنق] (intellectus instrumentalis) と、神的[الله] [العنق] (intellectus divinus) と、可能態[بالقدرة] [العنق] (intellectus in potencia) と、到達獲得[مستفاد] [العنق] (intellectus in effectu) と、以上五種の叡智が緊密に結び合わされ、各々が私達(人間)に内在[فيها]する[innatus]叡智の五種の相と看做される。話題の【ο θεῖος νοῦς [神々しい叡智] : intellectus instrumentalis [器官道具的 収智]】(希 112 頁 27 : 亜 197 頁 4 : 羅 81 頁 31) で、亞訳の神的を、羅訳が「器官道具的」と変えた理由も、当イスハーカ解を尊重した結果であろう。因みに神々しい叡智は、アレクサンドロスの『叡智論』(希 113 頁 2-4 (亜 197 頁 10-11 : 羅 81 頁 39-82 頁 1)) で、前 4 世紀のアリストテレス著『靈魂論 : Περὶ ψυχῆς』1・4[408B29-30]【他方また叡智は恐らく一層神的で非受動の何か [29]30】である。: ο δὲ νοῦς ἵστως θειότερόν τι καὶ | ἀπαθέτης ἐστιν。】を踏まえて使われていると思われる。【彼[ミュティレーネーのアリストテレス]は確かに言っていた、全体[前 4 世紀の]アリストテレスに従い、叡智を神々しく不滅で在ると看做すべきなら (εἰ ὅλως ὑπολαμβάνειν χρὴ κατὰ Αριστοτέλη θεῖον καὶ ἀφθαρτὸν [3]4 εἰναι τὸν νοῦν,)、以上[ミュティレーネーのアリストテレス]の様に[内在叡智論 : 希 112 頁 5 - 113 頁 12 : 亜 195 頁 3 - 198 頁 8 : 羅 80 頁 41 - 82 頁 13]を】考え、別様に考えない事が適切である、と。】(希 113 頁 2-4 / 亜 197 頁 10-11 : 羅 81 頁 39 - 82 頁 1) 【[叡智が] هنا [ここに] ها [さあ]、[10]11] [前 4 世紀の]アリストテレスの[رأي] [ارسطو طاليس] [意見] [على] [رسالة] では[إلى]、消滅の[الفساد] [カーピル] [غایل] [قابل] [غير] [神的] [الله] [هذا] [أو] [و] [その様に] [هذا] [فقط] [هذا] [أو] [و] [私達は考える] [ظن] [よう] [إن] [すべきで] [ينبغى]、叡智で[يمكن] (私達が考えるべきは)他の[آخر] [جهة] [على] [無い] [لا]。: et ideo oportet putari quod hic est intelligencia [81 頁 39] [82 頁 1] divina non recipiens corrupcionem, secundum sententiam Aristotelis】。ここで「消滅の[الفساد] [カーピル] [غایل] [قابل] [無しで] : non recipiens corrupcionem」 (亜 197 頁 11 : 羅 82 頁 1) と訳されている原語「不滅で : ἀφθαρτος」(希語 113 頁 3) に関しても典拠を示すと、前 4 世紀のアリストテレス著『靈魂論』1・4 / 3・5 に、【他方また叡智は[魂の]中に生じ、或る 実体 で在り、消滅する事は無い、と思われる。: ο δὲ νοῦς οὐκεν ἐγγίνεσθαι [18]19] οὐσία τις οὖσα, καὶ οὐ φθείρεσθαι。】(1・4[408B18-19] / 3・5[430A22-23])【しかし[叡智が]思惟したり、思惟しなかったりする事はない。離在した時ののみ、それは正に在る所の者であり、これのみが不死で 永遠 。: ἀλλ' οὐχ ὅτε μὲν νοεῖ ὅτε δ' οὐ νοεῖ. χωρισθεὶς δ' ἐστὶ μόνον [22]23] τοῦθ' ὅπερ ἐστί, καὶ τοῦτο μόνον ἀθανάτον καὶ ἀΐδιον。】と確かめられる。

前掲の希語原典には無い追加文面 (亜 197 頁・脚註 8 : 羅 81 頁 13-19) の終結部でイスハーカは、【それ即ち[لانه] 到達獲得[مستفاد] (叡智であり)、それは又[وهو] それ自体[اته] (の) 本質[النوع]において[في]】(ムスタファーアード) と述べ、到達獲得叡智が使う潜在能力、即ち叡智の器官道具[آل]を、調合[خلط]から出来たものと説明している。話題の調合[commixtio]は『叡智論』の内在叡智論でも $\kappa\rho\alpha\sigma\iota\varsigma$ [クラースィス] 混合調和[الاحتلال] [commixtio]として浮上する。【一方そこで混合[調和]され $\kappa\rho\alpha\theta\acute{e}v$ (混合[調和]された) [الحادي] [فينا]、当能力[التي] これは[هي] 収智の器官道具[آل] (であり)、調合[خلط]から出来たもの[الحادي] (である)。: eo quod ipse est adeptus et est in sua essentia in effectu; nam [17]18] ipse intelligit et non agit in nobis, nisi per virtutem que est in nobis, que est instrumentum ejus profluens ex commixtione;】と述べ、到達獲得叡智が使う潜在能力、即ち叡智の器官道具[آل]を、調合[خلط]から出来たものと説明している。話題の調合[commixtio]は『叡智論』の内在叡智論でも $\kappa\rho\alpha\sigma\iota\varsigma$ [クラースィス] 混合調和[الاحتلال] [commixtio]として浮上する。【一方そこで混合[調和]され $\kappa\rho\alpha\theta\acute{e}v$ (混合[調和]された) [الحادي] [فينا]、当能力[التي] これは[هي] 収智の器官道具[آل] (であり)、調合[خلط]から出来たもの[الحادي] (である)。: eo quod ipse est adeptus et est in sua essentia in effectu; nam [17]18] ipse intelligit et non agit in nobis, nisi per virtutem que est in nobis, que est instrumentum ejus profluens ex commixtione;】と述べ、到達獲得叡智が使う潜在能力、即ち叡智の器官道具[آل]を、調合[خلط]から生成し、結果また[道具]器官を[火焰かその類が]調合物 $\mu\bar{\iota}\gamma\mu\alpha$ (調合[خلط] : commixtio) に内在する叡智に提供し得る時は恒に、(即ち、[13]14] 収智は[混合] $\sigma\omega\mu\alpha$ 体 $\pi\bar{\alpha}\nu\mu\alpha$ (調合[خلط] : commixtio) に内在する叡智に提供し得る時は恒に、(即ち、[13]14] 収智は[混合] $\sigma\omega\mu\alpha$ 体 $\pi\bar{\alpha}\nu\mu\alpha$ 全体[body] [كل] [omne corpus] に内在し、この混合体の全体もまた[基]体[で在る]故、) この $\ddot{\sigma}\rho\gamma\alpha\nu\mu\alpha$ [道具]器官 (أداة) [器官道具] :

（潜在能力 [قدّة] : *virtus*）と、言われる。: ὅταν μὲν οὖν ἐκ τοῦ σώματος τοῦ | κράθεντος πῦρ γένηται ἢ τι τοιούτον ἐκ τῆς μίξεως, ὡς καὶ ὄργανον δύ- | νασθαι τῷ νῷ τούτῳ παρασχεῖν, ὃς ἔστιν ἐν τῷ μίγματι τούτῳ (διότι [13/14] ἔστιν ἐν παντὶ σώματι, σῶμα δὲ καὶ τοῦτο), τοῦτο τὸ ὄργανον δυνάμει | νοῦς λέγεται ἐπιτήδειός τις δύναμις ἐπὶ τῇ τοιάδε κράσει τῶν σωμάτων | γινομένη πρὸς τὸ δέξασθαι τὸν ἐνεργείαν νοῦν.] (希 112 頁 11-16；亞訳 195 頁 9-13；羅訳 81 頁 3-9)。更に『叡智論』の外來叡智論がこう補足する。【他方また私達は πῦρ 火焰（火：ignis）を、ποιητικῶτατον 最も創出的（能力の [قدّة] 極み [علية] において動的 [فاعلة] : 能動的 [agens in ultimo virtutis]）と言い、その理由は、全て [πᾶσα] 質料 [ὕλη] [質料] : *materia*）に関し、火焰が獲得する質料全てを焼き尽し [تَقْنِي] [燒き尽し] : *consumit*）、火焰自身に養分 [として質料] を供給する。実際火焰は [質料] に養われる意味で受動である (*تَفْعُل* [影響を受ける] : *patitur*)。正にその様に私達に内在の (ἐν ἡμῖν : 私達に内在の) [فِيَنَا] : *in nobis*) 収智も創出的 (الفاعل [能動的] : *agens*) と考えるべきである。】(希 111 頁 19-22；亞 193 頁 4-6；羅 80 頁 10-13)。

凋落期アラビア文化圏の12世紀アウェロエス時代、既にギリシア思想界に関する情報も豊かと成り、アレクサンドロスに非Noologist(叡智論者)の方向が見出され、この結果 irgend ein Empirist(経験論者の誰か)と言う線上に彼の姿が浮上し、これを恰好の論敵としてアウェロエスが排す。

in actu. secunda est intellectus qui in potentia est in anima. tertia est intellectus cum exit in anima de potentia ad effectum. quarta est intellectus, quem uocamus *demonstratiuum*.¹

目新しいのが第四の quartus 叡智 intellectus で、他はアレクサンドロスの三種に相当し、前述の創出的 叡智 [能動的 叡智 : intellectus agens] が第一の primus 叡智 intellectus、質料的 叡智 [質料的 叡智 : intellectus materialis] が第二の secundus 叡智 intellectus、素質能 [habitus : 生得才能] を追加獲得し [能力増強し] た [一種の] 質料的 叡智 が第三の tertius 叡智 intellectus に相当する。かつて『叡智論』の亜訳と羅訳では 外來 叡智を、第三の叡智の発展形態の [到達] 獲得叡智 [intellectus adeptus] と解釈している。そこで第四の叡智であるが、これをキンディーは『叡智論』の最後四分の一の終結部で説明する。【 الرابع : النفس [anima] 中から : من : ex】出現する [الظاهر : apparens] 叡智 [intellectus] で、それを [靈] 魂が現し出す [آخر : آخر] 時は恒に (それを君が發揮する時 : cum propalaueris eum)、それは [靈] 魂の外で : (君の外で : alio a te) [靈] 魂により [منها : بالفعل] 現実態として [يكون موجودا : ينبع] 見出され存在する (erit in effectu : 現実態となるであろう)。: quartus uero est intellectus apparens ex anima, qui, cum propalaueris eum, erit in effectu in alio a te.] (亜①358 頁 3-4 ; «L'intellect selon Kindî» 160 頁 5-6 : 羅 9 頁 8-10 / 羅 9 頁 9-17) 【従って、第二叡智は、第三と第四から [区別され]、結果、第三叡智は、魂が望む時、それを魂が apparere [出現] faciat [させ] れば、それ [第三叡智] は魂に [対し] 生成する、それが私達の [魂] 中で第三叡智 adeptio [獲得] の最初の時 (第一段階) であれ、私達の [魂] 中から [ex nobis] 第四叡智 apparitio [出現] の第二の時 (第二段階) であれ。また、その時、魂は [第三と第四の] 叡智を行使する。故に第三叡智は魂の adeptio [獲得物] であり、[第四英知に] 先行しており、また魂が望めば、それ [第三英知] は魂の中に見出される。第四英知、実際それは現実態の姿で、ex anima [魂の中から] apparens [出現する]。: intellectus igitur secundus est ex tertio et quarto, eo quod tertius est adeptio animae et fit ei ut faciat eum apparere, quando uoluerit, vel prima hora suae adeptionis [in] nobis, vel secunda hora suae apparitionis ex nobis. et tunc exercet eum anima. ergo tertius est ille qui est animae adeptio quae praecedit et cum uoluerit erit inuentus in ea. quartus uero est qui est apparens ex anima in effectu.]。

agens]は、私達の[心]魂[心魂: anima]の部分や或る潜在能力[能力: virtus]でも無く、むしろ外から
[外側から: ab extrinsecus]到來し私達の中に誕生する、この創出的叡智を私達が思惟する時は恒に。即ち實際一面、形相[形相: forma]の把握により思惟する事が誕生するのであるから、また他面それは非質料的形相[叡智的理念: 叡智界の心象]で在る故、質料を決して隨伴せず[独立し離在で]、かつ又その質料から離在でも無い、實際思惟される時は恒に。】

一方キンディーの出現する叡智は話題とならないが、他方イスマークの[到達]獲得叡智は創出的
ムスクファード、アクル ポイエティコス
・ヌース ファーライル、アクル
在論や宇宙論にまで敷衍し、能動叡智の最高位を第一叡智として全諸原理の原理に据える。

相として据え、更に[到達]獲得[المستفاد]**叡智が生じる [العقل]** [حصل] (叡智が獲得[状態の叡智]と成る)迄、それら諸形相が次第に離在[状態]に近付くよう努める。かくして人の[靈]魂の実体が、或いは人が、それにより人が実体化される所のそれ[獲得叡智状態]と共に、能動叡智に一層より近接する様に成る。これが究極の[قصوى] [السعادة] ([人生の] 究極限界[終極]) であり、終極的[آخرة] 生[حياة] ([別の] [彼岸の] 来生) である。即ちその理由は究極的に、それにより人が実体化される所の或るもの[獲得叡智状態]が獲得され、かつ人の終極的[الآخرة] [الأخير] [كمال] (究極の perfectio 完成) が獲得されるからである。:intelligencia agens [...] Ipsa enim est que ponit eas formas in materiis et deinde studet|approximare eas separacioni paulatim quousque acquiratur intel·|lectus.
[28|29] Et sic substantia anime hominis uel homo cum eo per quod subs·|tanciatur, fit propinquius ad intelligenciam agentem et hic est finis|ultimo, et uita alia, scilicet quia ad ultimum acquiritur homini quidem per quod substanciatur et acquiritur perfeccio eius ultima.] (並 30 頁 9／31 頁 3-7：羅 123 頁 23／26-32)。

【Jinbun-kagaku-kenkyû 2012 : Geisteswissenschaftliche Studien der Philosophischen Fakultät der Universität Kôchi (=Kôtzsch) im Jahre 2012. Band 18 herausgegeben von der geisteswissenschaftlichen Abteilung der Philosophischen Fakultät der Universität Kôchi (=Kôtzsch) : Études des sciences humaines de la Faculté des Lettres de l'Université de Kôtchi en l'an 2012. Tome XVIII édité par la section des sciences humaines de la Faculté des Lettres de l'Université de Kôtchi : Kôchi-daigaku. Jinbun-gakubu. Ningenbunka-gakka. Editio die I Julii anno MMXII】

2012年7月1日発行

編集兼
発行者 高知大学人文学部
人間文化学科

高知市曙町2-5-1

印刷所 (有)西村謙写堂
高知市上町1丁目6-4

νοῦς θύραθεν : intellectus extrinsecus

TAKAHASHI, Katsumi

Tirage à part tiré des
Études des
sciences humaines de
la Faculté des Lettres de
l'Université de Kôtchi,
KÔTCHI, JAPON
2012